『ありがとう剣道』

秋田県
雄信館内山道場
小学６年　　佐　藤　悠　月

「感謝とは何だろう。」これは、私が成長するきっかけとなった想いだ。剣道を始めた頃は、道場の先生である父と日常生活や剣道のことで行きちがうことなんてなかったのに、学年が上がるにつれて増えてきた。父の言っていることは正しいが、私が素直に受け止めることができなかったり、自分の想いをうまく伝えることができなかったからだ。

私は幼い頃から人前に出るのが苦手だった。自分の想いをしっかりと相手に伝えたい、そしてみんなの役に立ちたいという気持ちがあったが自分の中の壁を越えることができずにいた。そんな時、学校で生徒会役員を決めることになった。私は生徒会副会長に立候補した。いつもなら一歩踏み出すことができなかったはずの自分が自ら手を挙げていた。体の真ん中がギュッと熱くなった。もしかしたら私は毎日自分が変わることのできるきっかけを探していたのかもしれない。

六年生になって学校行事が増え、みんなの前であいさつをすることも多くなり、自分の気持ちを相手に伝えることができてきた。その頃から父に対しても素直に気持ちを伝えられるようになってきた。両親と話しているとどれだけ私のことを考え、どれだけ理解してくれているのかがよく分かる。それは仲間も同じことだ。つらいことや、くやしさを共に乗り越えてきた仲間とだからこそ味わえる、喜びや達成感がある。また、熱心に指導してくださった先生や一緒に汗を流してきた仲間の想いが痛いほど分かるからこそ、自分のせいでチームが負けてしまった時は、胸が苦しい。

私はこの想いを誰よりもよく知っている。四年生のときに体調を崩し、家族や先生方、仲間に長い間心配をかけたときのことだ。みんなが頑張っている中、私はあまり稽古をできずに試合に臨み負けてしまったり、欠場してしまったりしていた。仲間に対する申しわけないという気持ちがくやしさとなり、いつまで迷惑をかけ続けるのだろうという気持ちが苦しさに変わっていった。

そんな中で私を支えてくれたのは、「悠月、大丈夫?」「悠月、待ってるからね。」という先輩や仲間の思いやりの言葉だった。一年近くが経ち、次第に稽古に臨めるようになってきた。私はその時初めて、剣道をできることの喜びを感じた。また、それだけではなく、自分の心の中に、感謝の気持ちも生まれた。

そして、ふと手にしたある本をきっかけに自分が今こうして生活していられることがとても幸せなことだと思い知らされた。私が稽古の時に飲んでいるスポーツドリンク一本を買うお金で、恵まれない国の五人の子どもの命をポリオという病気から守ることができるのだ。私はこのことを知り、生徒会での募金活動に今まで以上に力を入れた。剣道を通して学んだ思いやりの心をもって、わずかでも誰かの役に立ちたい、と強く思ったからだ。

「感謝とは何だろう。」そう、感謝とは、いつでも私のことを温かく見守り、接してくれる家族。何も分からなかった私に一から剣道を教えてくれた先生方。どんな時でも声をかけ合い、助け合いながら一緒に頑張ってくれる仲間。そして、私が通っている雄信館内山道場。これらすべての存在が私の生活になくてはならないものであり、決して、当たり前にあるものではないということをかみしめ、素直な心で「ありがとう。」と伝えることではないだろうか。「相手を想いやること」「礼儀を大切にすること」「謙虚であること」それらすべてのことが、感謝の上に成り立ち、つながっているように、今、思える。

残された小学校生活、仲間達と一生懸命に稽古に励むと共に、剣道を通して学んだ感謝の心を後輩達に引き継いでいきたい。これまで私を支えてくれたすべての人達への恩返しの気持ちを込めて。